

## 新種のノリを発見、センジュアマノリと命名

水産大学校 生物生産学科  
千葉県立中央博物館分館海の博物館

### 研究の背景・目的

1. ノリ（スサビノリ）養殖は、日本の海面養殖で生産量が最も多く、重要な産業のひとつです。
2. 近年の気候変動によりノリ養殖生産量は減少傾向にあります。そのため、育種による気候変動に適応した新品種の開発や新しい養殖種の探索が急務となっています。
3. 気候変動対策のひとつとして、地域に生育する海藻類を活用した地域産業の創出が挙げられます。そこで、ノリ類を中心とした地域海藻資源の探索を目的に、各地に生育するノリ類の調査を行いました。

### 研究成果

1. 山口県下関市、千葉県いすみ市、銚子市で採集されていたノリ類のひとつが、形態観察とDNA分析から未記載種（学術論文で正式に発表されていない生物種）であることが判明しました。
2. 形態的な特徴として、生長過程で葉状体の根元にある根様糸細胞から新しい葉状部を発出することがわかりました（図1）。この特徴は、これまでに報告されている他のノリ類にはありません。
3. DNA分析の結果、オニアマノリ属（*Neoporphyra*）に属する新種のノリであることが判明したため、令和3年度に以下のように学名と標準和名を命名しました。

学名：*Neoporphyra kitoi*（ネオポルフィラ・キトイ）

標準和名：センジュアマノリ（千手甘海苔）

学名の属名に続く後半の部分である種形容語「*kitoi*」は、本種の最初の発見者である水産大学校名誉教授鬼頭鈞先生への献名です。また、標準和名は、本種を室内培養していると次々と新しい葉状部を発出し、まるで千手観音のような様相を示したことに由来します（図2）。

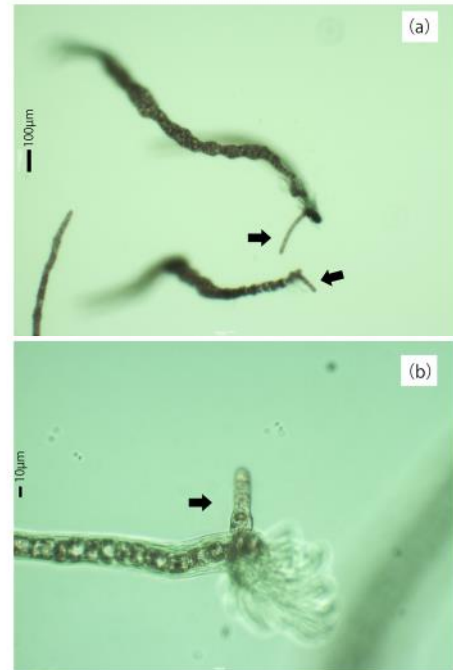


図1. 室内培養により根様糸細胞から発出した新しい葉状部 [(a)、(b) 矢印部分]



図2. 多くの葉状部を発出した藻体

4. 2021年に公表した新種記載論文では、水産大学校が配置されている下関市の沿岸において、2012年に採集したセンジュアマノリを使用しました。2012年以降もセンジュアマノリの調査を継続していましたが、下関市沿岸では2014年以降のセンジュアマノリの生育は確認できていませんでした。しかし、2022年2月の調査において、本種を8年振りに再発見することができました(図3)。



図3. 下関市沿岸において8年ぶりに再発見されたセンジュアマノリ

#### 波及効果

1. この度、新種として記載されたセンジュアマノリは、葉長20~30cmほどの大型に生長するノリであり、千葉県では食用利用されている地域もあります。このため、自生地付近を中心とした地域特産種としての活用が期待されます。
2. 本種は、養殖ノリ(スサビノリ)がほとんど生長しない25°Cでも生長するため、高水温耐性を有することがNiwaらにより報告されています(注1)。このため、新規の養殖素材としての活用も期待されます。
3. 水産大学校における「水産植物増殖学」等の講義に地域資源の活用や地域振興に向けた事例を反映させ、人材育成に貢献しています。

本成果が記された論文

Abe et al. (2021) *Phycological Research* **69**: 237-245

DOI: 10.1111/pre.12464

引用文献

注1 : Niwa et al. (2022) *Aquaculture* **548**: Part1, 737650